

開明
小說

春雨文庫

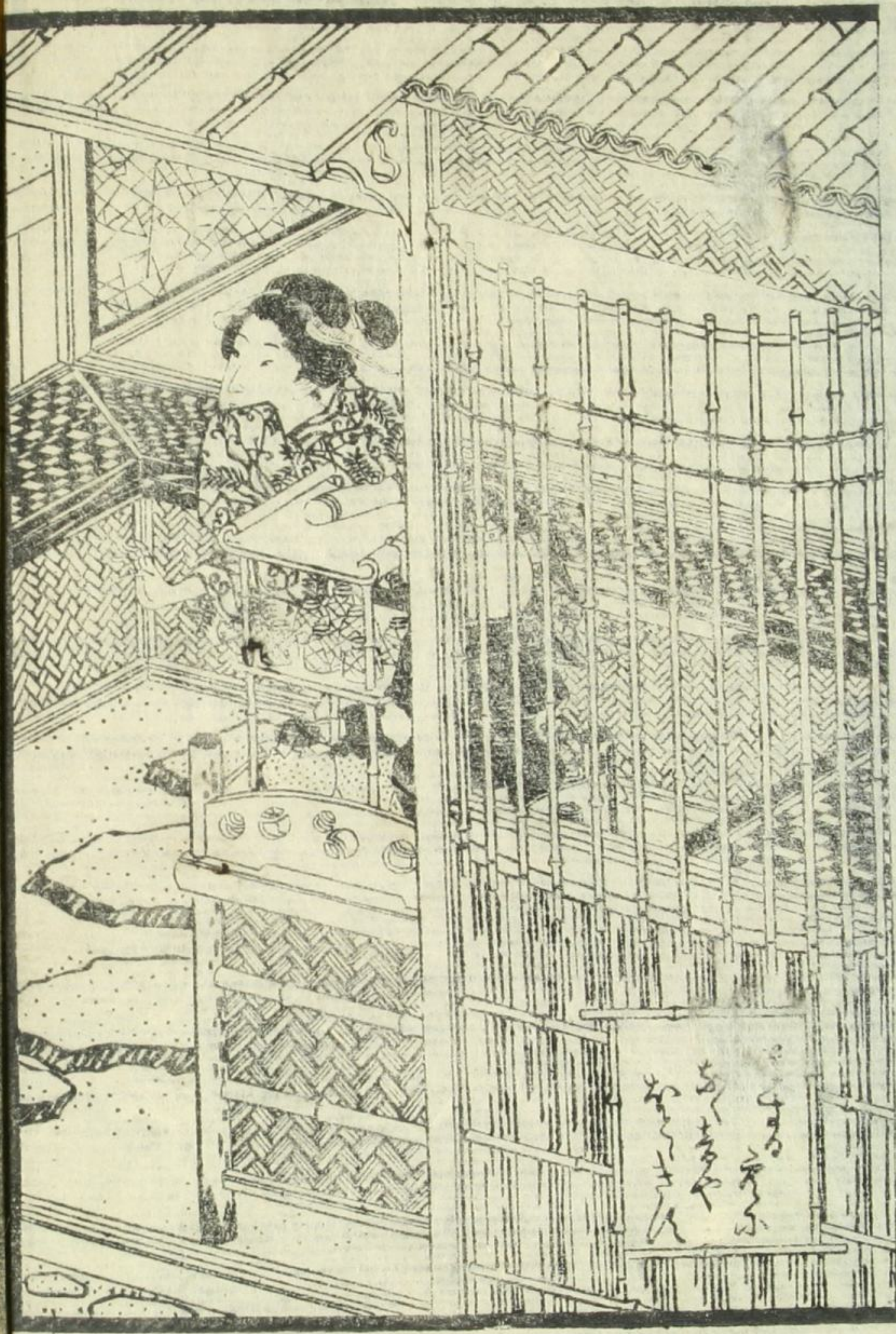
初編
上

20

25

30

35



雨の
 音も
 聞か
 ず
 春
 風
 吹
 け
 ば
 心
 ざ
 ら
 ぬ

雨園坪中菴



小結

開眼

春雨文車

二

世

春
 轉
 離
 轉

松村春輔編輯

開明

小説

春雨文庫

二冊編

櫻雨園社中蔵版



春雨文庫之序

并も這書を春雨文庫と題名けりも
 松葉巴の唱歌を礎と或も故人の小説
 物を翻案做し部分より只本文の
 眼目も既往十有餘年閑鎖和攘の説
 癸り海内鼎沸の時も當り丹心報國の
 壯史の義を泰山の重きと較ぶ命を鴻毛の

輕きより倣べ美名を青史に殘さるべきを
奸智を逞ふ一時の榮花を顧とけ
汚名を千歳に傳る倭臣あり或る貞操死
為る身を薄命に終り或る孝順の不幸に
して身を苦界に沈むる未通女あり
當時見聞為る所有為轉變の憂世あり
此や恁而我師春輔大人も其人々の真貌

春雨序

ある事迹を折よめもる筆記せしれ物
今も櫻雨園窓下の文函は嵩むをりて這回
梓よ上へ更小辞を飾せし春雨文庫と
号けらまはし莫遮江湖は近頃流布はる
史畧やりの物牛は汗棟小充までと茲に
復夫の種ありて架空の説を著さるる
専ら婦幼に讀易く解譯を昔と

綴もぐ大人君子の東より西よりと
 達の御愛又顧を只管願ひ稟ふらん
 文は撫了述る者も序

于時明治九年冬二月

南枝の棗も稍々蕾を

破る頃

細雨園春驪



鶴田容書

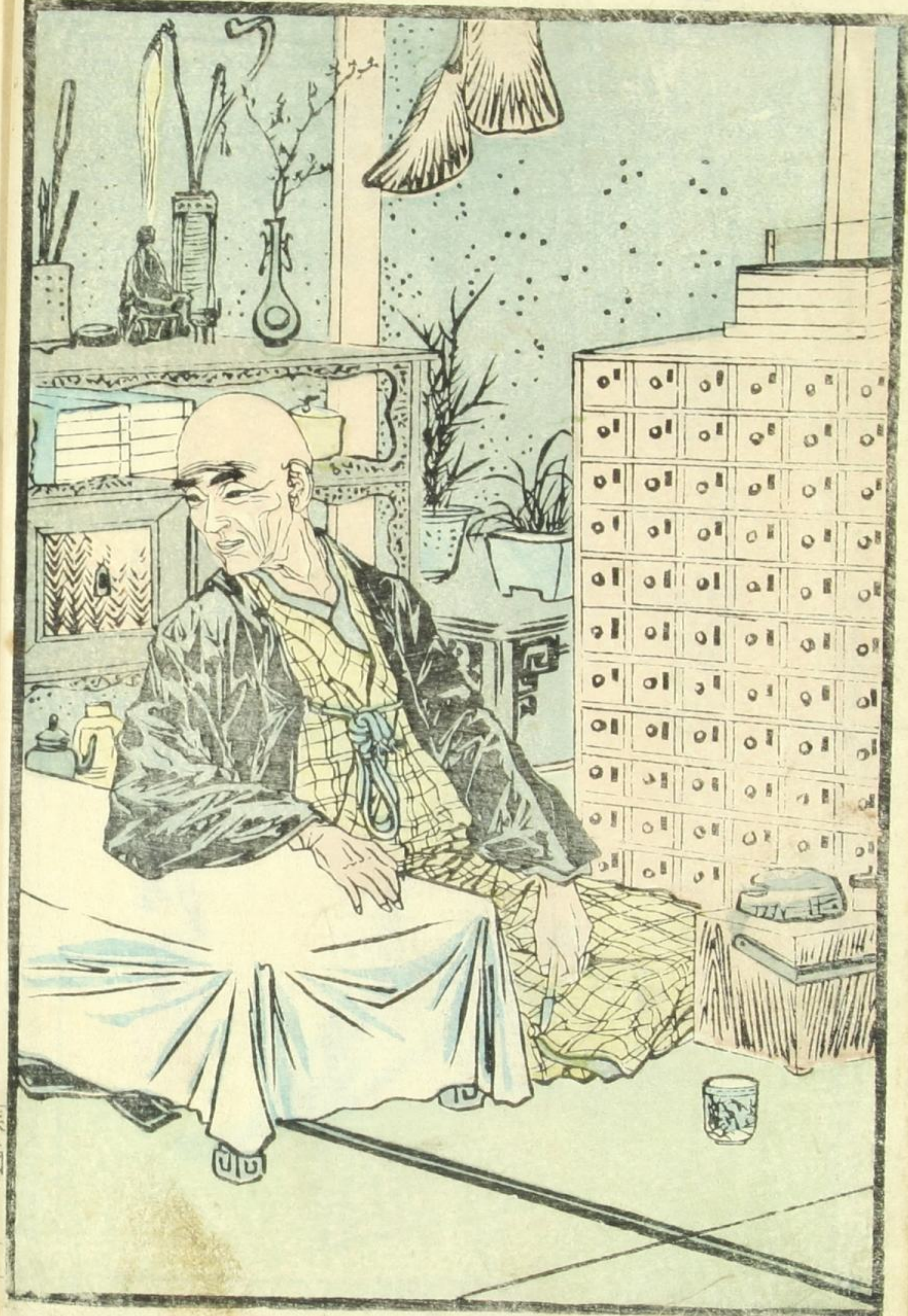
近藤芳樹翁が詠と
 鳴東四時の今
 柳の春も花の袖ゆの色も
 春のあけの空のうら
 声
 汀のさびき腰ひきこ
 るるあけの空もさび
 けはえあけ



近藤芳樹



喜遊きゆう
父正ちちのり菴あん
おのおののの
ささのの





嶋田の妻
宅木屋
街の納涼

廿年前の横濱岩龜樓上扇の間の真寫

春雨文庫上の巻

あつきの

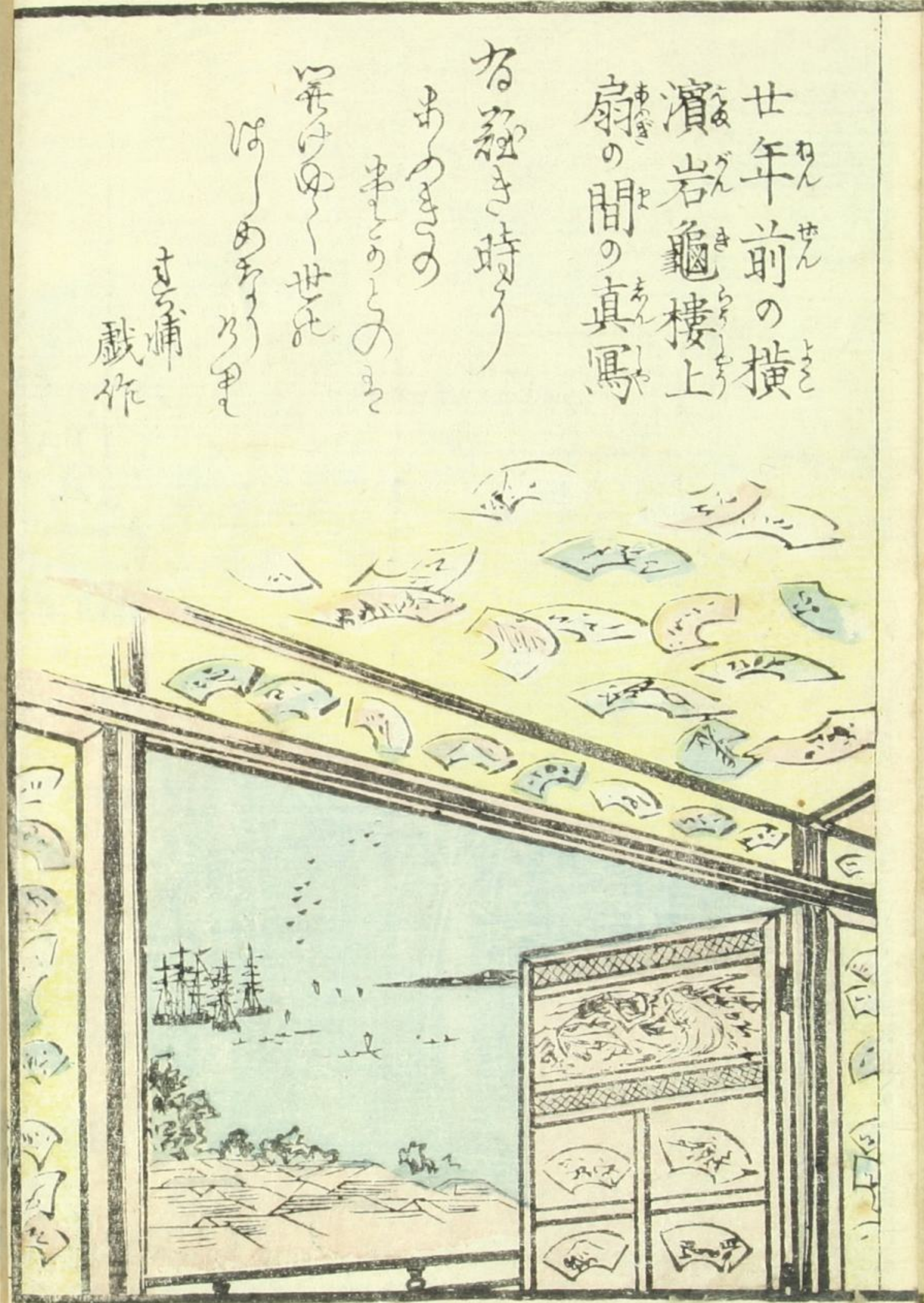
あつきの

あつきの

あつきの

あつきの

あつきの



春雨文庫上の巻

東京

松村春輔著述

大久保春驪校訂

第一回

九尺二間の棟小按摩針立陰陽師糊賣り波ア
洗濯屋鼻アの腕ど宿六を喰りせる女髪結おれハ
娘の臂の光をも仰りど僥倖を得る老嬢あり或ハ
現女日償金貸と種々百般の産業よ浮世を渡る

裏借屋その路次口の井戸端の長屋中のあつた
そを捜して世間へ觸廻る鑓棒引の隊長と言ひ
まゐる山の神達に三人寄まつた女奴といふ字の齋へ
咄し声一ツやお引さん洗濯へへへあつたまん聞て
お呉ヨ昨夜も内の野呂間野良が何處ぞ飲ぶ
大酔のあつたあつたけの泥濘へ轉げ込ても爲
泥ごころけのあつた歸つて来あつた大平樂を言
つて居るうう面が憎ううう洗つて遣る氣もあ

かつかけもどらも打棄る譯あつたううあつた振
出しを置うと思つて泥をうりあつた冴が襟も
扇も油垢を塗つてやうう汚まゝ居るりんごう
熱灰汁でもシヤボンでも急お落やが爲あつた子
でもお前の處の外さんあんごう呑むおわりごう
冴のけしと私の所の一日稼ごと二日の遊ぶ
のみのごう困らへ子今朝も横町の湯屋の二階
ふんぞりかつかつて居ると私がお引張つて来

無理小仕事小追出〜と〜と〜とア子〜お〜と〜とやア
そうとお前の隣ト〜と〜と大夫工面グ宜くあり〜と
見〜と〜と老嬢まで衣袈ガ出来〜と〜とアアサ那方の
娘も此間お〜と〜と青ツ鼻汁とたら〜と〜と居〜と〜と此頃
ト〜と〜と美も為あ顔と真白小塗立〜と〜とあ〜と〜と
名〜と〜と歩〜と〜とぐ子何〜と〜とでも時々且那ら〜と〜と人ガ来〜と〜とる様子
どうよ是追と言〜と〜とふものゝ鯛ツ子と〜と〜と買〜と〜とつと夏もあ
か〜と〜と〜と昨日も肴屋と呼込〜と〜とん〜と〜とと鰹の刺身を自

慢ら〜と〜と作らせ〜と〜と居る〜と〜とくら面グ怪〜と〜と〜とと〜と
〜と〜と引替〜と〜と可憐〜と〜と〜とあ〜と〜と角の内〜と〜と〜とヨ那人の皆
川町の表通り小居〜と〜と〜と太田正庵と〜と〜と〜と名札ま〜と〜と
出〜と〜と〜と些〜と〜と〜と近所と流行〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
者〜と〜と〜と自分〜と〜と〜と病氣の詮方〜と〜と〜とあ〜と〜と〜と〜と見〜と〜と
三年越〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と表の住宅も持〜と〜と〜と切〜と〜と
〜と〜と〜と裏へ引込〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と内義さん
迄ガ病氣〜と〜と〜と〜と〜と枕と並〜と〜と〜と〜と〜と〜と居る〜と〜と〜と

無^ま困^こる^らう^らう^う子^こエ^え「全^{ぜん}昧^{まい}あ^あの^の正^{せい}庵^{あん}さん^{さん}と^との^の人^{ひと}が
お^お心^{こころ}よ^よの^の結^{けつ}構^{こう}人^{ひと}ど^どの^のお^お内^{うち}義^ぎさん^{さん}が^が引^ひ摺^{ずり}と^と来^きて
居^ゐる^のの^のど^どう^うの^の意^い氣^き地^ちの^のあ^あの^の所^{ところ}へ^へ煩^{わづら}つ^つこ^こう^うへ^へよ^よ去^き年^{ねん}の^の
大^{おほ}地^ち震^{しん}で^で表^{おもて}の^の住^{うち}居^ぢが^が潰^{つぶ}ま^まさ^さの^のど^どの^のを^を堪^たら^らあ^あの^の
ハ^は子^こ「マ^ま那^な住^ぢ居^ぢハ^ハ地^ち震^{しん}で^で潰^{つぶ}ま^まさ^さの^のど^どう^うけ^けら^ら子^こエ^え潰^{つぶ}ま^まさ^さ
ど^どと^とろ^ろろ^ろ耽^{ちん}も^も正^{せい}庵^{あん}さん^{さん}が^が梁^{はり}の^の間^まへ^へ狭^{せま}く^くれ^れる^のを^を
大^{おほ}騒^{さわ}ぎ^ぎを^をや^やつ^つて^て出^でし^しと^と考^かわ^わら^らあ^あの^のう^う「あ^あの^の程^{ほど}夫^{それ}
ら^ら裏^{うら}へ^へ引^ひ込^こん^んの^のお^おだ^だ子^こ「何^{なん}ど^どう^う知^しら^らあ^あの^のが^が那^{あの}方^{はた}の

内^{うち}へ^へ「番^{ばん}可^か憐^{れん}を^をう^うあ^あの^の千^ちイ^いさん^{さん}と^と言^いふ^ふ娘^{むすめ}ッ^ッ子^こ
ど^ど「歳^{とし}ハ^ハ漸^{しだ}々^々九^くッ^ッ十^{じゅう}ッ^ッど^どう^うの^のお^お兩^{りょう}親^{しん}よ^よお^お粥^{かゆ}を^を
喫^くさ^させ^せる^る賣^うり^りも^も出^で来^きあ^あの^のと^と言^いつ^つと^と隣^{りん}ッ^ッも^も照^てッ^ッも^も
枝^{えだ}豆^{まめ}や^や附^つ木^ぎを^を賣^うつ^つと^と歩^あ行^ゆて^て住^{うち}居^ぢへ^へ歸^{かえ}る^ると^と親^{おや}の^の
者^{もの}病^{びょう}を^をも^もる^る様^{よう}子^す「今^{いま}時^{とき}の^の子^こ供^{ども}ま^まあ^あ珍^{めづ}ら^らし^しの^のヨ
「ホ^ほニ^に子^こに^に其^{その}う^うへ^へ那^{あの}見^みハ^ハ目^め鼻^び立^たち^ち美^いゆ^ゆく^く最^もう^う四^よッ
五^ごッ^ッも^も年^{ねん}を^を取^とつ^つて^て居^ゐる^ると^と妾^{めかけ}お^お出^でぬ^ぬら^らが^が且^{また}那^{あの}を^を
取^とら^らう^うが^が又^{また}ハ^ハ芳^{たけ}原^{はら}へ^へ身^みを^を賣^うら^らう^うが^が親^{おや}の^の困^こら^らあ^あく

ありおまきりへ正咳をまきりのぞ咽が干渴をあら
 あいのろろ病人を使ふの氣の毒が手届あろ
 其處の土瓶を引寄せと呉あつて妻アイヨ少待
 つくお呉と一言ひみあろ苦くそろふ布團の上ろ
 這出く火鉢小掛とある古土瓶の湯と良人の
 枕元ある茶碗小鉢のきき正庵の重とろあ
 枕を離れ起返り湯と吞込息をつた正ホソ
 思へば此身のゆるる因果か者ハ又とあろの長の

病氣の其うへ小居宅も家財も地震で毀さる
 頼もと思ふかぬ一途が煩ひ付と呉とろ
 困窮する詮方もあいら年端も行あ



千イ兒ちいご小こ明あき暮くれ苦く勞らうをさせるのの可う憐れんおおくくて
こんか憂うれい目めを見みやうより此こ身みア疾たく死しこい
けもど死あたう那あの兒この行ゆく末すえグ何どう拾ひろあらううと案あ
事ことららもも思おもひ切きり死しああもも為なるら迎むかも此こ大だい
病びささ煎ゆ豆まめ小こ花はなの咲さくやうかと更ともああくおお暇ひま乞こ
ぶぶと念ねんつつ居いるるかかぬぬ石い小こ喰く付つても快た
ああつつ何どう卒そつ那あの兒こと人ひと並なら小こ育そああげげるる吳ごああせせ人ひと是こ
ちちりりりり頼たままとと枕まくら小こ顔かほとああ當あてて涙なみだとと

俱とも小こ咳せき入いまま側そば小こ寤ねるる居いるる女に房ぼうが起あぎぎ今いま抱か為い
ううののああもも其その弱じやくも重おもき病びゆゆへ脊せ中ちゆうとささままるるカカささ
泣なり外がの更とぞああ死し余よ所しよの表あをを毫つもももももも
髮かみ頭あたまの岩い多た婆ばアア門かどああ明あけけととままるるとと這は入いり
何なんとと面おも白しろくくももぬぬ人ひと又また二ふた個こゝろとと愁あはれれううととああんんぎぎ
ぞぞももぬぬ人ひと癡ち止とああせせへへ併ありり人ひとの悲かなししのの三さん年ねん
ささもも我が慢まんををままるるううとと泣なくく泣なくく泣なくく泣なくく泣なくく宜いがが此こ身みア
夫つまをを聞きちちゆゆ居いららままややせせんんヨヨ先せ月げつ貸かささ一いち歩ぶの

金を一償ぐ返せよと言ひあさるうう貸て進てうう
廿日も立の間小娘ツ子グ附木を賣つて錢を漸々
三百這入と位の支トやア利足ある追付ねへ爰の
内へ壹分と言つちやア出へあくいければよか前
邊を鋪て居る布團を抵當小貸とのだらう今日
金が出来あのと云やア布團を引剥て持てぬる
ううまう然う思つて此のひちせうト言ふま駭く
正庵が苦し死胸を摩りあがう止るる程か前の

言ひあさる所へ至極道理をか吐くぞうか見掛
通り夫婦あがう枕を並べて寐て居ませむよく可
か前方の病氣ハ今始まる支トやアね人の
まが愈る迄べんくと待て居ちやア此身の腮が
千阿らうア四の五のと面仆と約束通り此の布
團を持て往くうう退るせんト遠慮會釈もあ
うと婆ア夫婦が密たる古布團を返取らん
とまら所へ此家の娘が立歸り夫と見るより物

らうして千ア弁お姥さん其布團があつてはか爺
さんやお母さんが晩うう凍へう死おせううと
其お小まがりう禁むもふとヨヤ娘ツ子帰つこのう
お前が丈程欲くあう布團を並く往く習うお貸こ
金を返すものう千ア弁お金と言つては在おせうんが
附木を賣つてお米を二合買つて残りが五十を
かりありおせうう今日の所は是堪忍して下
さのおせうう此子もあんまりお夏と言ふとア

あいのう大救壹分とりの金を取お来う五十をう
その端多錢が持てぬうもものうイケ馬鹿々々
しの何れも今日の勤兵があうお入ト又かの布
團をおつりお拭も千ア弁待つてお呉あさ
今井戸端で余所の姥さん達が咄して居るあ
私が取う四ツ五ツ年を取つて居ると吉原へ身
を賣てもお爺さん達の困らあいやうおあると
言ひようう今私の身を賣てお前のお借を返

あさうんか爺さん達も少い金の進ら
きるやうか夏が何るあう私の體ハ何様あう
宜う然う爲う物どうお嬢さん何様爲う
ハ何りおせんうんまアヤか前ハ思ひの外伶俐
兒どうきひ近所ハ心易い判人が居るう直
聞て見て進ゆうト言あう立お掛るを正庵
慌て声少くアアモいお欲さん少一待つて下さ
奈何小貧苦小通つてと言つて可憐お小此兒

何様う賣らまはものう野夫を夏と言
さんか素人の了簡でハ苦界と言ふうどん
あら怨の物のゆうお思ふ大間遠ハ私ハ此
前の御改革の出る時分近ハ吉原ハ言ハ及ハ深川七場所
根津谷中千住板橋の宿場もどうの襟小燻の
出来る程泥水の商賣も爲う見申して結句氣
来々面白いのサ此兒あんなア今賣つてうと
言つて直小か客小出まのう娘のゆう小可

愛うらまきく藝更ハ勝手物習りまきくこんち
故衣を着き三度の飯もろくく喰ひま居るうら
見るとのりくく仕合だぞ知もやア爲まのヨ併か前
が不兼知あく無理小勸めくお賣とん言ハあ
替り小壹分の形ハ此布團を持つく往くろく彼
是ハ何るまの子正何指も病人ダ布團を取らまはし
くハよク見せへま夫ごうく此兒の言ふ通ろま
るが宜ハ子お爺さんもお母さんも私ダ今く居あく

あつたろくお薬を煎くろくお粥を持つくろくお脊
中を撫くろくまきる者ダあのがくお困りごらうと思
ふと夫ダ寔小悲くのけまくと此お姥さんのお借も
進あいのごん置まよまの何卒私の體を賣つて
少くてもお金ダ取まごう夫で美味ものでも喫て
些とも疾く病惱を快くして私の所へ逢来き
お呉あまのヨ夫をりりりガ樂くごらト歳ハ
似合ぬ健氣ハ辞泣くぬ振くして目の中ハ涙一むい

含^くこ^こを^を見^みる^る双^ふ親^{しん}の^の腸^{ちやう}も^も断^た離^りる^る程^{ほど}の^の哀^{あは}れ^れさ^さる^る小^こ我^わが^が兒^この^の多^たを^を取^とり^り抱^かき^き寄^よせ^せ歎^{なげ}き^きの^の數^{かず}々^々口^{くち}説^{せつ}き^き立^た声^{こゑ}あ^ある^るい^いく^く泣^な泣^なむ^む目^めも^も當^あら^らま^まぬ^ぬ形^{かたち}状^{じやう}の^の最^{さい}憐^{あは}れ^れも^もあ^あら^らま^まぬ^ぬ見^みへ^へ小^こけ^ける

第二回

尔^{なん}程^{ほど}小^こ正^{ちやう}庵^{あん}の^の女^{むすめ}兒^めが^が節^{せう}あ^ある^る志^し操^{そう}の^の不^ふ便^{べん}さ^さや^やる^るう^うこ^こあ^あら^らま^まぬ^ぬ己^{おのれ}を^を得^えざる^るの^の事^{こと}詰^つめ^め小^こ至^{いた}り^り遂^{つい}小^こ件^{けん}の^のお^お欲^{よく}と^と頼^{たの}ま^まる^る新^{あたら}吉^し原^{げん}町^{まち}二^に丁^{てい}目^めあ^ある^る甲^か子^こ屋^や

と^とり^りふ^ふ妓^き樓^{ろう}へ^へ質^{あつり}入^{いれ}の^の約^{やく}定^{ぢやう}め^めして^{して}僅^{わずか}く^くを^をあ^あり^りの^の身^みの^の代^{しろ}あ^あら^らま^まぬ^ぬ一^{ひと}個^{こゝろ}の^の女^{むすめ}兒^めを^を遣^つか^かへ^へ血^ちの^の出^でる^るや^やう^うか^か金^{かね}を^を得^えず^ず不^ふ義^ぎ理^りの^のあ^あり^り借^かけ^けを^を償^{つぐな}ひ^ひ残^{のこ}る^る金^{かね}あ^あら^らま^まぬ^ぬ姑^{あぢ}く^くの^の夫^{ふう}婦^ふが^が露^ろ命^{めい}を^を繋^つぎ^ぎに^に貧^{ひん}と^と病^{びやう}の^の逼^{せま}ら^らま^まぬ^ぬ正^{ちやう}庵^{あん}の^のそ^そう^う其^{その}妻^{つま}と^と人^{ひと}と^とあ^あら^らま^まぬ^ぬ今^{いま}の^の女^{むすめ}兒^めを^を誰^{たれ}あ^あの^の受^う返^{へん}せ^せ者^{もの}あ^あら^らま^まぬ^ぬ故^{ゆゑ}終^{つい}小^こ甲^か子^こ屋^やの^の於^おか^かで^で遊^{あそ}ぶ^ぶ女^{むすめ}並^{なら}小^こ抱^かへ^へ置^おき^き此^{こゝろ}兒^こが^が十^{じゅう}五^ごふ^ふあ^あり^り春^{はる}頭^{づか}て^て其^{その}名^なを^を子^こ日^ひと^と喚^まび^び初^{はじ}め^めて

客きやくの出でせし小容せうりやう貌まうよきのをとあしき親おやの孝かうある
 者ものあまの主人しゅじんゆもあさ善よく仕つかへ朋輩ともだち中ちゆうも睦むつま
 考かうく我わがが召めい仕つかふ禿かぶゆも隙ひまあるとたれに積つみ書かきあど
 自みづから教かへへ守まもりてうに此こゝ終しまあしむ甲子かのへね屋やの大おほ
 黒柱くろむすしとあるべし然しかれ其その處ところあに何なにう訳わけ合ありけん
 横濱よこはまの妓院ぎいん岩亀いんき樓ろうへ住ま替かひあるまま至いたりあはせ
 流ながしの勤つとめゆへ子日おひひのこをを厭いとふあはるねと
 外國ぐわいこくの客きやくの出でるん奈何いかんある思おもひぐさけむとて

此住このま替かひを辞いへしと云いふ横濱よこはまへ
 来きてくらと言いつと洋客やうきやくさんふ
 出でまやうみまま此身このみが
 させねんト岩亀いんきの
 主人しゅじんが口くち
 奇麗きれいな固かたく
 盟むすつと言いひ
 うが夫おとこあはるとて後あと



相終整ひ既小横濱へ至る小及び子日の喜遊
と名を更め小他の娼妓小競ぶ客のもて
あゝ慇懃ある小義氣ある小見ゆる小岩亀の
一枚看板と言はるる程の身とあり客の絶間も
あは中横濱居留の亜米利加人名をイルーと
言はる者喜遊が色香小深く惑ひ許多の金を
時散し喜遊の客ありと云ふ小岩亀の
主人も洋人の客に取らせよいと約せしと云

処ダ欲得づくあまは是等の訳で喜遊小
か為らるる小勧めらるるど更小受引く氣色も見
は然りとてこんあ福の神が舞廻んごのを取
逃さる奈何めも惜しの支と思は姑く病氣と
言あゝあどと客を釣付け置くあど小亜米利
加人の腹を立し私莫大金出しよと貴公龜遊
買ひせる條約しとありよは私虚言りひおせん
貴公虚言諾せんと真赤小あつて掛合り主

人の甚ど當惑せしうの客を程よく宥め置きし
喜遊を窺う小呼近づけ頻り小天窓を掻きあぐら
主「此身アせん」と言ふと今とありて後へも
先へも往く言ふ出来ぬ実小お前めも顔の合され
あの訳どう何卒此身を助けると思つて此お後
小言のうそ呉すのう言ふやア且那何がせんあふ
氣の掃る言があるんでありおまへ主「然るにサ此
間もおぬー小咄しと亞米利加の客人どう折角

とか前の言を那通り言つて居るおれを異人さん小
出る言の喜遊が否とておろしおまへと其處を商
賣の悲しきふせんお色氣のあの言の言の
うら病氣と言つて一日と延ばさうおまへ先も退屈
しと他の女郎おれも宜めと言ふとらうと思つ
うら余程おれおぬの言を思ひ込で居るとおまへ
是悲しくも喜遊をおまへとめふ條約がしとあまへ
此身を容小さんしと呉ると直小二百あのおまへ

若くは條約を遠くの時ハ丈夫の得金を取
らぬわづあうねんと今夜小通りの色階の枳合
此身も此廊より外見の商賣を爲し居て外國人小
得金を取る色うと言つちや實小暖簾を拘り
誤らうと爰の所を汲分る否でも何らうか出
呉ゆんうかぬうと務と兼知を去るハ逆上きん
居る客人どうら金を幾許でも取り汲身おぬの
爲りもある訳どうら爰等を一審氣を習く兼知

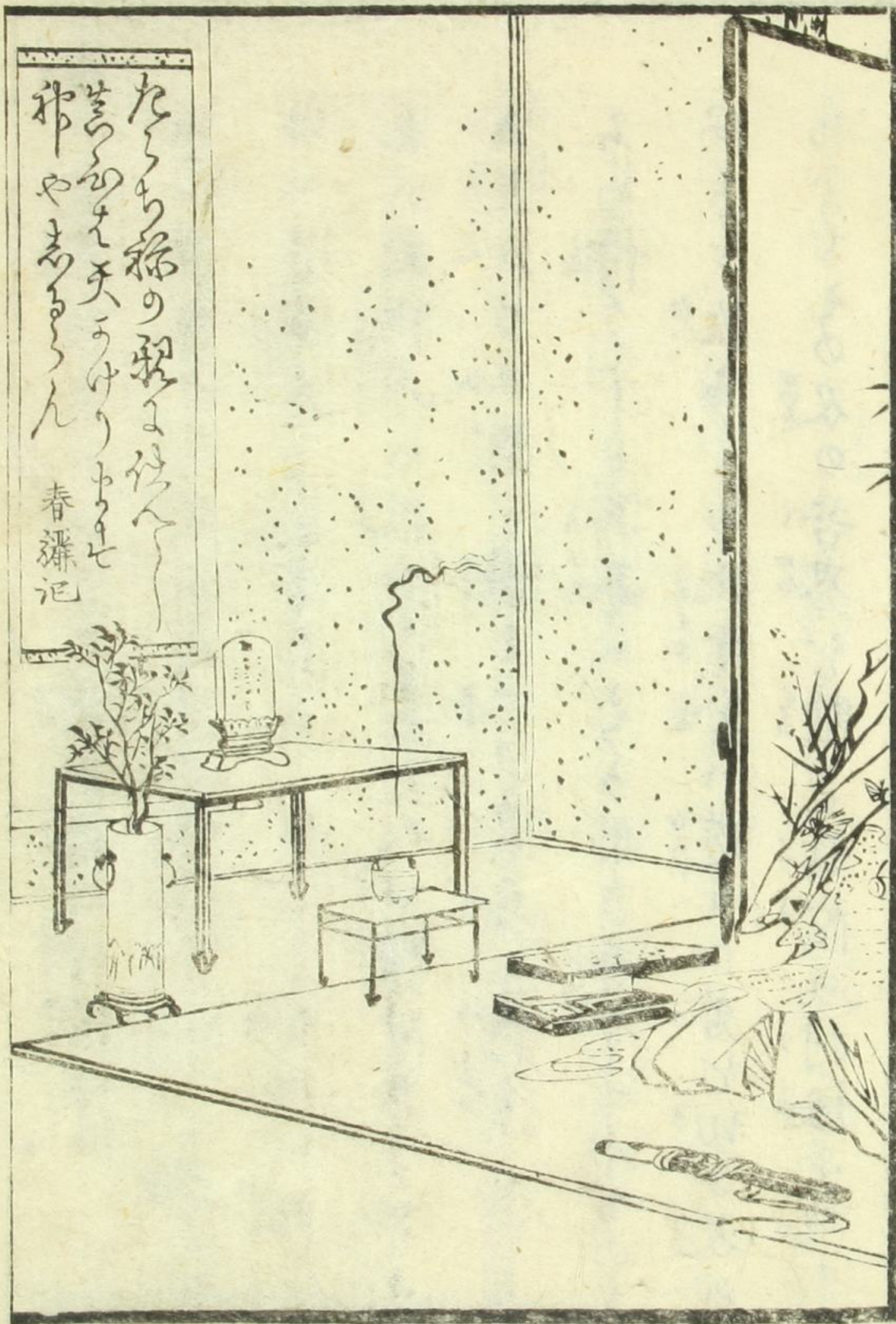
と爲ちや呉ゆんう外國人どうと言つと目の色
と髪の色を違つて居るやうかもの同く世
の人間どものを躬を任せると言つて然れど耻
でもありや爲ねん今此土地トや娼妓ハ勿論
素人の婦女子がソレヤンふあうり立流ハ親兄弟を
まことしく居るものガゆらうも在らうか名を取
よう得の世の中どものを今時おぬのやうな
野暮固い度を言ふものガ何るものうか甚むりや

且おさんのお言あえりる更やわり申せけ色ども
是が否さふ濱人住替の更を断ツんで何り申せヨ
私きやうざんか無理と言ふ客人でも爰が勤め
〜と思あううけい〜悪りの顔を見せをぬ〜と更ハ
ありませんぞ異人小肌を汚さる〜と言ツちやア
親の耻ある更やありおまうら解らぬ女ごと
お賤り立あせうけ色ども是ぢう〜ハ私の言状を
立お呉かとのふト言ひ放さる〜と困り果〜主人ハ

程も押返〜と主ある程おぬ〜の氣性ト申然ろ
思ふのり無理ト申あぬ〜此身も男〜一旦然ろと
言つ〜口いどんか更でも変らせぬ〜と義理ゆも
〜のみや〜あ〜ぬ所を面の皮を厚く〜と主
人ぞ抱への女希元は此通〜を下げ〜頼むのり
よ〜〜苦しい訳〜何〜約束更〜と何〜
め〜永の更の言のあ〜今夜一晚那客の機嫌
を取つ〜呉め〜とをぬ〜と否だ〜と言やア

今日うら 店へ戸をノお人ト申あつたあの変ふある
のどくろ義理も法も弁人お人無慈悲ある主人ごと
腹も立うが勤といふ一字も厚く何卒此身の顔
を立と呉め人ト拜むさかろ小頼よりけり喜遊の
姑く返事もあるをさう俯向く居りしが私
言状を立やうとまをばお店が立行あつと聞ちや
までも構ひあつた言ひをさすせんうら且那のお
顔の立やう小主エ申しや今夜那客人小歩を呉る

先ハ主マレ嬉しや七をば胸が落付とそんあ
急度る遠るあつて宜うト期とあつて洋客の弁人
斯と報告する彼イルースの飲びと此夜の別て金銀を
萌散る酒宴小時を移せども喜遊
が其座小出づる洋客の顔より焦燥と何ゆへ
出さぬと促さる主人の物の安うらねる自
喜遊の初座小至りたが無慙や短刀めり早晩
咽とさし串き糸小端のしむ外たる枕辺小一



通の遺書何ぞも小骸さきと披き見る文面めん

世小苦界小浮沈とまらるもの幾千万人と限るも

ゆりま我亦も勅まらるあつひとと父母の許し

ありぬ仇人小執ゆるまらる人口惜けきと只々

庄主人の四恩を顧と二ツの身の落命と何き

らめ侍りしが其基のちうねき黄金とあもの

何ぞが故あつめ此命今の遊女の身と切る又小

ゆゆのその又の苦界を離る弥陀の利扱小ぬ

糸くせく主人小辞しと亡た双親へ仕人ナリ

らせゆへ黄金の光りをも何ありせんわをら

しと思ふ欲の夢さよしと誠の身を急ぎゆゆ

無念の齒ぐを顛ハせ我ダ死骸を今宵の

客小か見せ下さき斯る卑くた浮き女さ入日の

奉の志ハ悠くぞと知らしめあめるべしゆゆ

あそぶふゆゆの女帝花

ゆる何者うう小神のぬらき

此喜遊このきゆうが傳つたへ其頃大おほのこ鳴なりて専まら義妓ぎぎと災わざ
稱なせり同時どうじ小こ亞國あこくの公使こうし某ある者もの吉原きちげんの娼妓しょうぎ
櫻木さくらぎと言いつる小こ眷戀けんれんと違ちがへて妾めかけとあさんとせ
しを搦な木ぎ辞いなるべき應あげざる故ゆゑ亞人あじん望のぞむを失はみしが
権勢けんせいをも手て小こ入いると窺ひそめ小こ閣かく老某らうあるの侍従お侍小
然しかむも侍従お侍の輒ただく諾うかひし頃とき搦な木ぎを抱か置かく
妓院ぎいんの主ぬしを召寄めいよせし速すみく小こ亞人あじんの望のぞむ小こ應あむ
べた青命あおめいせしうと搦な木ぎ固か辞いなりしことを聴きくは

乍はち一首いっしゆの歌うたを詠えいじて赤あかき心こころを述のべしと言いふ其その
歌うたのかの喜遊きゆうの詠えい歌うたと一字いちじも違ちがふ支とあはれぬが
全まく同吟どうぎんあるべからず又また附會ふくわいの説せつあるものゆゑ
確證かくていを知らぬとも因ゆゑふことを記しせしあり今いまの
開化かいげ小こ比ひぶる頗おほく頑固がんこ小こ似にたりし喜遊きゆうが
死ししと耻はぢを厭いとふは又是また娼妓しょうぎ小こ怖おそるべき倭魂やまとたまひ
ありと言いふべし

春雨文庫上之終

春雨上九

010190508205

